

「多様性の受け皿としての都市機能の分析－帰属意識の観点からの考察－」

佐藤泰裕 元兼務研究員

要 旨

本書は、様々な人々の社会的統合を、帰属意識やアイデンティティの観点から都市との関係で考察することで、多様な人々が暮らす大都市での共生のあり方を探ることを目的としている。

第一章では本書の分析の背景を説明する。

第二章では、本書の分析に用いる概念および手法を導入する。具体的には、都市における人々の活動を分析するため、都市経済学で考案されてきた集積の経済の概念と、単一中心都市モデルを紹介する。前者は、都市という限られた場所に人々が集まることの利点を示すものであり、後者は、都市における土地利用と人口分布を考察するための道具である。さらに、社会的統合を考察するために、アイデンティティ経済学の考え方を導入する。これは、帰属意識やアイデンティティも、少なくとも部分的には自己の意思決定の結果であると考え、その様子をゲーム理論の枠組みで分析するものである。

第三章では、導入した概念と手法を用いて、都市における少数派の社会的統合の問題を分析する。ここでは、社会的統合の利点を明示的に考え、例えば移民のような社会的少数派に属する人々が、社会的統合を望むのかどうか、そして、その結果としての都市内居住パターンがどうなるのかを分析する。この分析は、いわゆるエスニックタウンのように、特定の少数派グループが周囲と分離して居住する可能性がどのように生じるのかを考察するものである。分析の結果、同じ環境下でも、少数派が周囲と溶け込んで居住する統合居住と、分離して居住する分離居住との両方の可能性がある、いわゆる複数均衡の可能性が示された。

第四章では、少数派の意思決定だけでなく、多数派の意思決定も導入し、その相互関係を考察する。そこでは、社会的統合のメリットが、集積の経済を通じて、大都市ほど大きくなる。一方で、社会的統合のコストも交流の可能性とともに大きくなるが、その変化の度合いにより、大都市ほど社会的統合が進むかが決まる。この分析は、いわゆるゲートウェイシティのように、移民が大都市に集まる現象を考察するものである。その下で、少数派の人口規模や熟練が変化したときに、社会的統合の様子がどう変化するかを検証した。

第五章は本書のまとめである。

以 上